風雲

ふううん

佐伯泰英

交代寄合伊那衆異聞

|著者|佐伯泰英　1942年福岡県生まれ。闘牛カメラマンとして海外で活躍後、国際冒険小説執筆を経て、'99年から時代小説に転向。迫力ある剣戟シーンや人情味ゆたかな庶民性を生かした作品を次々に発表し、平成の時代小説人気を牽引する作家に。「密命」「居眠り磐音江戸双紙」「吉原裏同心」「夏目影二郎始末旅」「古着屋総兵衛影始末」「鎌倉河岸捕物控」「酔いどれ小籐次留書」など各シリーズがある。講談社文庫では、『変化』『雷鳴』に続き、本書が「交代寄合伊那衆異聞」シリーズ第3弾。

風雲（ふうう）　交代寄合伊那衆異聞（こうたいよりあいいなしゅういぶん）
佐伯泰英（さえきやすひで）
© Yasuhide Saeki 2006

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2006年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社プリプレス制作部
印刷———大日本印刷株式会社
製本———大日本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-275400-2

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

風雲

交代寄合伊那衆異聞

佐伯泰英

講談社

目次

第一章　左片手突き　7
第二章　講武場の鬼　71
第三章　伝習所候補生　134
第四章　カステイラの味　198
第五章　鉈と拳銃　262
解説　縄田一男　328

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

交代寄合伊那衆異聞

風雲

第一章　左片手突き

一

安政二年（一八五五）の暮れ、二十日過ぎから江戸一帯に大雪が降り積もり、尺余に達した。牛込御門外の座光寺家の裏庭にも膝に達する雪が積もっていた。

未明、大きな人影が木の切り株を肩に抱えて、六十坪ほどの庭のあちらこちらに配置していた。庭の一角にはこの界隈の屋敷を圧するほどの大銀杏が聳えていたのだが、季節が季節、すでに黄色に色付いた葉は風呂の竈にくべられていた。白一色の世界に老銀杏が千手観音のように枝を大きく広げていた。

大小、高さと太さが違う切り株が雪の庭に配置された。

「これでよし」

と独り言ちたのは、座光寺家の若い当主座光寺藤之助為清だ。稽古着の腰には小鉈が差し込まれ、大銀杏の幹に立てかけられた木刀を手にした。

座光寺家の野天の道場の中央に戻った藤之助は、心を鎮めて木刀を天に突き上げた。

夜空からは霏々と雪が降っていた。

藤之助は一瞬、

(江戸というところは、よう雪が降るわ)

と考えた。だが、それは一瞬のこと、腹に力が溜められ、呼吸を大きく吐いて吸い、止めた。

その瞬間、その脳裏から雑念は消えた。

藤之助の想念に広大な光景が浮かんだ。

伊那谷の風景だ。

諏訪湖に水源を発し、重畳たる信濃の高峰から流れ出る水を集めた天竜川が伊那の谷を南北に奔流し、遠州灘へと注ぐ。その大きな流れの背後には伊那山脈が立ち塞がり、さらにその後方に一万尺余の雪を頂いた白根岳、赤石山嶺が堂々たる威容を見せていた。

藤之助は想念の伊那谷の風景に対峙するように木刀を頭上に高々と構えた。

（流れを呑め、山を圧せよ）

これが座光寺家に伝わる戦場往来の剣技信濃一傳流の教えの基本だ。川と山を眺める山吹領の台地で門弟はまず気構えを習得する。

藤之助もまた陣屋家老にして剣の師片桐神無斎からこの気構えの手解きを受けて修行を始めた。だが、数年後、藤之助は胸に疑念を感じた。

大きな構えはよし、だが、二の手に工夫がないのだ。

戦国時代から時代は二百数十年も下り、武士の表芸、嗜みたるべき剣術は忘れられ、剣は細身になって腰の飾りに堕していた。

だが、江戸幕府を震撼させる出来事が立て続けに起こっていた。日本の四海の向こうから異国の大艦が押し寄せて徳川幕府の国是の鎖国制度をぐらぐらと揺らし続けていた。その異国の軍船の圧力に幕府はただなす術もなき立ち騒ぎ、うろたえ、策を講じることが出来ないでいた。

武士たちは慌てて先祖から伝わる甲冑槍薙刀を持ち出し、剣術の稽古を始めていた。だが、すべては時代遅れで付け焼刃だった。

藤之助は伊那谷から急に江戸屋敷に呼ばれてこの現実を知った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

「時代は変化し、異国の砲艦の響きは雷鳴の如く轟いていた」

肝を冷やすか、耳を塞ぐか。

千四百十三石と少ないながら交代寄合衆として徳川幕府の禄を食んできた座光寺家が奉公するべき時代が到来したのだ。

座光寺家が世に出る機会がそこまできていたのだ。

だが、かつて伊那衆の一人として武勇を誇った座光寺一族は江戸と伊那谷を往復する奉公を恙無く勤めるうちに、命を賭した奉公も斬り合いも忘れて、旗本八万騎の一家としてただ無難に生きていた。

それは過日、屋敷に入り込んだ刺客の一人になす術もなく狼狽する家臣団の態度が表していた。

藤之助は牛込御門外の座光寺家の家臣全員に朝稽古を命じた。座光寺一族の誇りを取り戻す一歩だった。

この朝、家臣らが野天の道場に姿を見せるまでには半刻の余裕があった。

藤之助は頭上に立てた木刀をさらに高く掲げると、

ええいっ！

という気合いを発し、走り出した。

大銀杏の幹に向かって突進する藤之助の方向が気配もなく左手に転じられ、切株の一つに飛び乗るとその反動を利して雪の原に高々と舞い上がり、木刀を振り下ろした。

びゅううっ！

木刀が雪を切り裂き、音を立てた。

その瞬間には藤之助は膝まで雪に潜らせて着地し、一拍もおくことなく斜め前方へと駆け、切株の中でも三尺五、六寸余の高い頂に軽々と飛び上がり、しなやかな長身を虚空へと飛ばしていた。

信濃一傳流の大きな構えの後、藤之助は独創の剣技を考案した。

「天竜暴れ水」

と名付けられた剣は、雪解け水を飲んで奔流（ほんりゅう）する川の流れが伊那谷のあちこちに突き出した岩場にぶつかり、四方八方に飛び散って再び流れに戻る光景に啓示を受けて創案したものだ。

対峙する敵に向かって一直線に突進することなく岩場に当たった流れが意思に反して右に後ろに虚空へと飛び散るように変幻自在に攻撃線を変えることだ。それは対峙する相手の予測を越えて行われねばならなかった。そのために普段の稽古が要（い）った。

この「天竜暴れ水」は敵が一人でも大勢でも有効に力を発揮できたのだ。
この技を持続させ、力を衰えさせないためには強靭な足腰とそれを支える内臓の機能、優れた膂力とくに腕力、さらには自在なる想念がいった。
藤之助は自らが独創した「天竜暴れ水」を座光寺一族の稽古の基本に置いたのだ。
半刻、休むことなく走り回り、飛び回る藤之助の長身は雪塗れになっていた。
「殿」
という声で藤之助は稽古を止めた。
木刀や竹刀を手にした家臣たちが野天の道場の端に立ち、雪を蹴散らして走る回る藤之助を呆然と見ていた。
「おお、来たか」
まだ朝の気配はない。だが、雪のせいで野天の道場は十分に明るかった。小姓の相模辰冶が身震いしている姿に目を留めた藤之助が、
「辰冶、寒いか」
「はい。いえ、寒くはございませぬ」
「ならば雪の上での座禅から始めるか」
ひええっ

と十七歳の辰治が悲鳴を上げた。

「まず体の筋肉を解さねばなるまい」

藤之助は座光寺家の武家身分、若党、中間の区別なく四組に分け、一組六、七人を野天の道場の東西南北の端に立たせた。

座光寺家に奉公する家来の中で例外は家老の引田武兵衛と飯炊きの弥助爺の二人だけだ。その二人が道場の端に建てられた五右衛門風呂の焚口の前で稽古の始まりを見ていた。

「贅沢ではございませぬかな」

と首を傾げる引田に、

「これも互いをよく知ることじゃあ」

と五右衛門風呂の設置を命じたのは藤之助だ。

冬場稽古が終わった後、汗を湯で流す。これも一族の結束を強める一環と引田武兵衛に命じて釜だけを買い求め、家臣たちで土台を築いて釜を据え付けたものだ。

弥助爺が五右衛門釜の下に火を入れた。それを見た藤之助が、

「よいか、おれの合図で道場を走り回り、切株が前を塞げばその頂に飛び上がり、雪の原に飛べ。もし、別の組と遭遇致さば竹刀で殴り合い、道を作れ。立ち止まること

も休むことも許さぬ。道場の中にはこの座光寺藤之助が立ちて、休むものは容赦なく叩き伏せる、そう心得よ」

六十余坪の野天の道場を四組の家臣たちが竹刀を手に動き回れば、嫌でもどこかで他の組にぶつかった。先に進もうと打ち合いを続けていれば、別の組が側面から襲いくるやもしれなかった。

「息も抜くことはできんぞ」

「どうする」

「じっとしておれば藤之助様の竹刀が飛ぶぞ」

「ならば動こうか」

「よし」

藤之助が道場の真ん中に立った。

「戦国往来の御世、伊那衆座光寺一族は戦場で倒れることは許されなかった。死すときも立って死んだ。敵陣を正面に見て、剣槍を構えて息を引き取った。それが伊那衆座光寺一族の気構え、覚悟であった。休むことも倒れることも許さぬ」

高々と掲げられた藤之助の竹刀が振られ、

「わああっ！」

「進め、攻めよ！」
「叩き伏せて前へ進むぞ！」
と自らを鼓舞した四組が雪の原に突進した。四組の先頭に立つ者は前方に敵方を感じた瞬間、思わず横へと避けていた。だが、そこにも前進する影を感じて、手近にあった切り株に飛び乗ると、
「ええいっ、これを食らえ！」
とばかりに竹刀を振るって躍りかかり、道場のあちこちで打ち合いが始まった。力を抜き、戦いを避けようとする組には藤之助が走り寄って、竹刀で尻を、肩を叩いて、
「座光寺一族のご先祖に申し訳ないぞ、さあ、かかれ、相手を打ち伏せよ」
と檄を飛ばし、鼓舞した。
この総がかり稽古、夏冬とわず天竜の流れの中で繰り返される実戦稽古の一つだ。もはや牛込御門外の座光寺家の野天の道場のあちこちに打ち合い、殴り合い、くんずほぐれつの戦いが展開され、湯気がもうもうと上がり始めた。
その稽古が半刻ばかり続き、藤之助が、
「止めよ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb